

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 27 日現在

機関番号：14301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2011～2015

課題番号：23560763

研究課題名(和文) 森田慶一建築論の生成論的再構築

研究課題名(英文) Reconstruction of Keiichi Morita's Architectural Theory : From a Viewpoint of its Generating Process

研究代表者

田路 貴浩 (Taji, Takahiro)

京都大学・工学(系)研究科(研究院)・准教授

研究者番号：50287885

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,700,000円

研究成果の概要(和文)：森田は「建築とは何か」という問いを建築論の根本課題とし、晩年の『建築論』に至るまで思索を続けた。その基盤となったのがウィトルウィウス建築書の研究であり、古典主義的建築論であり、森田はプラトン主義の本質論として建築論を構想していた。しかし、森田はヴォリンガーのゴシック建築論にも関心を寄せたが、ヴォリンガーはそこで制作の主体の問題を論じていた。また、森田が座右の書としたヴァレリー「エウパリノス」は、古典主義的でありつつ反イデア論的立場に立つ制作論である。本研究では、森田慶一の建築論を本質論から制作論への再構成に向けて、これらの手がかりを発見することができた。

研究成果の概要(英文)：Keiichi Morita considers a question 'what is architecture' as a fundamental research subject in architectural theory, and continued to think of it for his entire career. Basing on studies of Vitruve's architectural books and classicism of architectural theory in Occident, he investigated the essence of architectural theory. Meanwhile he was interested in the theory on Gothic architecture of Wilhelm Worringer that treated the subject of architectural making. Moreover Paul Valéry's 'Eupalinos' that was Morita's desk-side book discusses making of architecture from a viewpoint of classicist but anti-Platonist. These would be clues to convert Morita's theory of architectural essence into theory of architectural making.

研究分野：建築論

キーワード：建築論 森田慶一 分離派建築会 エウパリノス ポール・ヴァレリー ヴォリンガー

## 1. 研究開始当初の背景

かつて、日本における建築論研究をレビューする機会を得たことがある(拙稿「学界展望 建築論」『建築史学』2005年9月)。これが本研究の着想の直接的な契機となった。その中で建築論をめぐる議論を次のように辿った。1950年代の後半から、建築論は空間論としてさかんに論じられ、建築史学との交流もさかんに行われた。そうした議論から建築論自体の規定が問題として浮かび上がり、これを受けて森田は、建築論とは「建築とは何かを問うもの」と定式化した(『建築雑誌』1972年7月号「主集 建築論」)。この問いは研究者のあいだでその後も論じられ(『建築雑誌』1979年4月号主集「もう一つの建築論」)、80年代も建築史研究者とその立場についての議論が継続した(1980年建築学会大会研究協議会「建築史と建築論の間」)。ところが、90年代以降は実践的関心の高まりに相反し、「建築とは何か」という純粋な問いは退潮し、今日に至っている。

「学会展望」ではこのように述べたが、近年、実践的諸課題のなかで、「建築とは何か」という問いがふたたび要請されつつあるように思われる。たとえば、地球環境問題から生じた建築の長寿命化、あるいは建築の保存とくにまだ使用されている近代建築の保存問題では、時間的経緯のなかで、耐久性・利便性・美といった諸価値の増減が問題となっている。

時間の中での建築の存在については、C. Alexander, *The timeless way of building* (1979)、M. Mostafavi, D. Leatherbarrow, *On weathering: the life of buildings in time* (1993)などの著作があり、設計論としてもメタボリズムの建築家たちの諸論などがあげられる。一つの建築の構想・設計から建設、使用、解体そして記憶へと至る連なりを〈建築のライフ〉と呼ぶとすれば、〈建築のライフ〉全体を包括的に論じたモノグラフィも数多い。しかし、〈建築のライフ〉を建築の本質や価値の生成として理論化した研究はほとんど見かけない。

私はフランス・ルネサンス建築家の建築論研究(『フィリペール・ド・ロルムの建築論』1996年)から出発し、最近では日本近代建築家(丹下健三・坂倉準三・堀口捨己)の建築論に関心を広げてきた。建築家たちが「建築」をどのように包括的に把握したかを探索してきたのである。また上述の「学界展望」では、建築諸分野のなかでの建築論の位置づけや、建築論の方法論の整理も試み、建築論の包括的な見直し作業をおこなってきた。本研究はこうした作業の延長線に位置するものであり、森田慶一の『建築論』(1978年)に立ち戻り、〈建築のライフ〉全体に着目しながら、「建築とは何か」という問いの再構築をめざそうとした。

## 2. 研究の目的

〈建築のライフ〉を構想・設計/建設/現存/消滅と区分すると、「建築」と呼ばれるものには、現存の時期の実体的な建築物に限らず、構想・設計期のイメージや、消滅後の記憶なども含まれる。また、それぞれの時期の「建築」は建築家、使用者、一般市民など属性の異なる人々との関わりにおいて現れ、「建築」に様々な価値が賦与され本質が生成していくといえる。このように人との関係のなかで価値や本質を蓄積していく、イメージや実体としての「建築」の総体を〈建築態〉と呼び、それを包括的に理論化することを当初の目的とした。この目的のために、森田慶一『建築論』、および『建築論』に収録されたポール・ヴァレリー「エウパリノス」を起点に検討することにした。

そうして、まず森田慶一の建築論の特質とは何か、それはいかにして成立したのか、あるいは森田の建築論の立場から「エウパリノス」をいかに建築論に取り込むことができるのかなどの点について、予備的調査を開始した。しかしながら、これらの課題の広さと深さが予想を越えていたため、結局、森田建築論の特質とその背景、とりわけ「エウパリノス」との関係性を解明し、森田がなし得なかった建築制作論の構築を、「エウパリノス」を手がかりに試みることになった。

## 3. 研究の方法

下記の3点の研究目的に対して、おもに関連文献を収集し考察を行った。

### 1) ゴシック建築に対する姿勢

1927年に発表した抄訳「Worringer: ゴチクの建築思想、その他」を取り上げ、わが国におけるヴォーリンガー受容過程を調査した。とくに、当時の美学界の第一人者 大塚保治の講義内容との比較検討を行った。

### 2) ヴァレリー「エウパリノス」との出会い

森田が生涯座右の書とするヴァレリー「エウパリノス」とどのような契機で出会ったのかについて、いくつかの考えうるルートから調査を行った。とくに京都帝国大学文学部教授との関係について、わずかながら残された遺品を利用し、森田と関係深い教授たちとの思想的な関係性の分析を行った。

### 3) ヴァレリー「エウパリノス」の制作論

森田は難解と言われる「エウパリノス」について邦訳を行ったが、その建築論的な解釈は示さなかった。この課題に取り組んだのは加藤邦男であったが、加藤の解釈にはまだ再検討の余地があると思われた。そこで、「エウパリノス」を包括的理解からはじめ、その論理的体系化を試みた。

#### 4. 研究成果

上述の研究課題について得られた成果は次のとおりである。

(1)「Worringer:ゴシックの建築思想、その他」の意図とその背景

1927年、森田慶一はヴォリンガーによる *Formproblem der Gotik* の抄訳を発表した。森田はウィトルウィウス研究を本格化させるさなか、ゴシック建築論の訳出作業を行っていたことになる。そこにはどのような背景と意図があったのか、とくに美学者大塚保治と建築家瀧澤真弓に注目し明らかにした。

まず1章では、ヴォリンガーの『ゴシック美術形式論』の内容を確認した。ヴォリンガー (Wilhelm Worringer, 1881-1965) はリーグルの「芸術意思」を発展させ、テオドール・リップスが唱えた「感情移入」に加え、「抽象」衝動という新たな概念を提唱し、これらを芸術作品の形式の深奥に内在する芸術意思の二大類型とした。『ゴシック美術形式論』はこの理論をゴシック建築の分析に適用したもので、古典建築と比較しながら「ゴシック的形式意志」というものの抽出が試みられている。森田が訳出した以上の3章はたしかに『ゴシック美術形式論』の中心的箇所である。しかし、ここで注目したいのはリップスの感情移入論が導入されている点である。ゴシック建築の構造とそこに表現される力や運動性の分析は、リップスの感情移入論に多くを負っていると考えられる。

2章では、森田の周辺の美学・哲学そして建築の各分野で、いつ頃から『ゴシック美術形式論』に関心が向けられるようになり、どのように理解されたのかを調査した。日本の美学者や哲学者がヴォリンガーに言及しはじめるのは森田の抄訳発表からしばらく後のことになる。中野勇による邦訳『ゴシック美術形式論』の刊行は1944年(昭和19)まで待たなければならない。中野は1924年に大塚保治の指導によって卒業論文のテーマを決めた際、大塚からこの著作を紹介されたという。しかし、1923年の講義録『大塚博士講義集』にはヴォリンガーへの言及はない。

京都帝国大学の深田康算はドイツ・フランス留学期間中にはリップスから直接指導を受ける機会を得、帰国後、感情移入美学の先駆的受容者の一人として数編の論文を発表している。しかしながらヴォリンガーについての言及はまったくない。

哲学者の言及を見てみると、和辻哲郎が1935年の『続日本精神史研究』のなかで『ゴシック美術形式論』を取り上げている。西田幾多郎はたびたびヴォリンガーを取り上げているが、それは1936年の「論理と生命」に始まる。森田の抄訳は美学者や哲学者の言及に先じるものであったことが分かった。

3章では、大塚の「建築論」をより詳細に分析した。この講義のなかにヴォリンガーの受容は見えないが、その影響を伺うことができる。大塚はリップスの感情移入論を参照し

て、建築の形態の把握について構造的把握と力の感情移入があるとする。構造的把握というのは、建築の構造を力の機械的な関係として把握する見方であり、力の感情移入は形象に運動性を把握する見方である。大塚は力の感情移入によってゴシック建築の運動性を分析しているが、その記述はヴォリンガーの分析に類似している。そのうえ、そのヴォリンガーの記述の多くは森田が訳出した箇所と重なる。森田は大塚と同様、リップスの感情移入論からヴォリンガーのゴシック建築の分析へと関心を広げていったのかもしれない。

4章では瀧澤真弓のヴォリンガーへの言及を検討した。ヴォリンガーをいち早く学習し紹介したのは美学者や哲学者ではなく建築家瀧澤真弓だった。瀧澤は1925年に『ゴシックの形式問題』第12章の概要を紹介している。森田が訳出した3章のうちの一つと重なる。瀧澤はほぼ忠実にヴォリンガーの論述を要約していて、ゴシック建築を素材を否定してまでの意志的表現、形式による質料の「徹底的意志的克服」と理解し、「更に大なる現実以上のもの」への憧憬を「ファウスト的精神」と解釈し、それを支持している。新しい建築造形へと邁進しようとする自分自身の意志をヴォリンガーのゴシック精神に重ね合わせている。森田は、瀧澤のこのようなヴォリンガーに対する強い共感に触発されてヴォリンガーを訳出するに至ったのかもしれない。しかし森田は、ヴォリンガーがその論究の中心に据え、瀧澤が共鳴したゲルマン的精神、その形式意志というものにあまり反応していないように見える。

5章では森田の初期論考を検討し、ヴォリンガーの翻訳の意図を探った。森田は大学卒業直後の論考で、構造学からの合理的アプローチと生命的な個性の表現の統合をみずからの課題として提示している。そしてその後、森田は感情移入論に影響された「生の力」という観点を得るようになり、そこから構造と芸術を統合するものとして「構立て」という概念を案出するに至っている。この思考の流れのなかゴシック建築における構造の純一さと自己の表現の統一を論じているが、ヴォリンガーが明確に参照されることはなかった。

ヴォリンガーに直接言及するのは抄訳の翌年に発表した論考においてである。このなかで森田はウィトルウィウスの建築理論を研究し、古代ギリシアの建築観を継承するル・コルビュジエの設計態度の模倣を宣言していた。森田はヴォリンガーを参照して、フランス的なものに多様性、ドイツ的なものに純粋性を割り振って、古典的なものとゴシック的なものの両者を許容しようとしつつ、森田は構造と形象、用と美の統一をヴォリンガーの理論に期待しているのである。

以上の、調査と考察をとおして、森田のヴォリンガーへの関心は、構造と造形、合理性

と美の統一という問題意識に端を発し、たどりついたものであることが明らかになった。リップスの力の感情移入からヴォリンガーのゴシック建築分析に至る道筋は大塚と似ている。一方、ヴォリンガーに直接言及した瀧澤は、合理性の徹底を突き抜け精神的なものへと高揚しようとする熱情、すなわちゲルマン精神に率直に共鳴したのに対し、森田はやがて古典主義を選択し、それを厳格に徹底させ、自己の表現の自由を放棄し、自律的な法則を「戒律」として遵守する立場を主張するに至る。ここに制作の主体の問題が現れている。

## (2) 森田慶一の「エウパリノス」との邂逅

ヴァレリーの「エウパリノス」は、森田慶一の古典主義的な建築論を支える支柱であった。森田は、1932年にヴァレリーの「エウパリノス」についてはじめて言及している。森田はどのような契機でヴァレリーに出会ったのだろうか。可能性として考えられるのは、1) ル・コルビュジエの著作、2) 関西日仏学館の授業、3) 京都帝国大学文科大学教官の講義と著作である。これらについて、公刊されている出版物に加え、関係機関に所蔵されている資料、森田の遺品を調査した。

第1章では、ヴァレリーの著作活動を概観し、「エウパリノス」の出版と翻訳の経緯を確認した。「エウパリノス」は1921年にルイ・スューとアンドレ・マールの建築作品集の序文として執筆された後、1923年にヴァレリーの著作として出版され、以後、版を重ねる。1927年には外国語訳として、はじめてドイツ語に訳出される。日本では1930年代からヴァレリーの著作の邦訳が活発化するが、「エウパリノス」の邦訳は1954年であり、森田はそれよりはるか以前から「エウパリノス」に出会っていたことになる。

第2章では、森田とヴァレリーの出会いの経緯を明らかにした。森田が著述のなかでヴァレリーに言及するのは1932年の「キトゥルーキウスの『理論』」が最初である。参照されたのは「エウパリノス」の一節で、建築家エウパリノスが自分のつくった小神殿を乙女の身体の数学的比例の再現であると説明するくだりである。森田はこの箇所を参照しながら、世界秩序の分有としての建築という観念を提示している。この論考の公表と時を同じくして、森田は在外研究員としてフランスへ渡り、そこで1923年版の『エウパリノス』を購入した。帰国後、戦争の混乱の中、ウィトルウィウス建築書の邦訳に打ち込み、引き続き「エウパリノス」の邦訳に着手した。訳出作業は1948年には完了し、1958年、京都大学退官を記念して出版された。それは伊吹武彦による初邦訳からわずか4年後のことであった。

第3章では、森田とヴァレリーの出会いの契機をル・コルビュジエの著作に探った。

1928年の『「いみたちを・こるぶしえり」その他』で、森田はル・コルビュジエの設計の模倣を宣言し、それに続いて模倣の理由を示し、古代ギリシア人の建築観を概説しながら、それがル・コルビュジエの建築観に継承されていると論じている。1932年の「キトゥルーキウスの『理論』」では、古代ギリシアにおける世界秩序の分有としての建築という観念が「エウパリノス」を介して論じられることになるが、この小論には、すでにこれと同じ論点が見られている。ただし、ヴァレリーの名前はいつさい現れない。しかしながら、森田がこの小論の冒頭で *Almanach d'architecture Moderne* (近代建築名鑑) を引用していることには注目しなければならない。というのも、この書物の中でル・コルビュジエはヴァレリーの「エウパリノス」に言及しているからである。ただしル・コルビュジエは、制作の最初の線が煙のような曖昧な線となったという「エウパリノス」の一節を引用し、自分であれば最初に幾何学的な十字形を描くと断言してヴァレリーを批判している。さらに、ル・コルビュジエは建築を自然と同じく世界秩序の分有とみるのではなく、偶然的な自然に対して、建築は幾何学的意志によって創造されるものとして対置している。ところが、森田は「世界秩序の分有としての建築」という観念を古代ギリシア人そしてル・コルビュジエに見だし、1932年の論考では「エウパリノス」も同様に読み取っている。それはル・コルビュジエの考えからは決定的にずれている。このように見ると、森田は *Almanache d'Architecture Moderne* のなかでヴァレリーと「エウパリノス」の名前を目にしたかもしれないが、森田をヴァレリーに引きつけ独自の解釈へと導いた契機はさらに別にあったと考えられる。

第4章では、京都帝国大学文学部および日仏学館との接点を探った。森田は京都帝国大学助教授就任後、文学部の講義に積極的に出席している。なかでも美学者深田康算の講義からプラトンの芸術論を学び、それが「エウパリノス」のプラトニズム的解釈につながったと推測できる。しかし、これによって森田はヴァレリーを誤解してしまったのかもしれない。というのも、ヴァレリーはプラトニストではないからである。人間を超越した叡智界の原型という考えをヴァレリーははっきりと否定しているからである。

森田がヴァレリーについてまとまって学んだのは関西日仏学館での講義においてのことだろう。森田の遺品の中に、'L' *Evolution de la poésie française contemporaine* (フランス現代詩の展開) と題する資料がある。これは1929年から303年にかけて、ロジェール・バレというフランス人講師が関西日仏学館で行った10回の講義録である。森田はフランス在外研究の準備として、この講義を受けたようである。この中の第2回から第4回まではヴァレリーの詩

の紹介にあてられ、ヴァレリーの詩の特質がかなり詳しく講じられている。しかし、「エウパリノス」の解説は含まれていない。

京都帝国大学文科大学の教官のなかで最初にヴァレリーを論じたのは九鬼周造（1888-1941）ではないかと考えられる。九鬼は1929年に京都帝国大学文科大学西洋哲学史講座の講師に着任すると、翌1930年に、「仏蘭西哲学の特徴」(Caractères généraux de la philosophie française)と題する講演を関西日仏学館で行っている。この講演は森田が受講していた留学準備コースの特別講義と考えられ、森田がこれを聴講し、九鬼と面識を得た可能性が考えられる。九鬼の講演は哲学を中心としたもので、ヴァレリーについては言及されなかったようである。しかし、1930年に出版された高名な『「いき」の構造』の結論部のなかで、「エウパリノス」からヘルメスの小神殿についてのくだりが引用されている。それは、森田が1932年に「キトウルーキウスの『理論』」のなかで引用する箇所とまったく同じである。ただし、その解釈はまったく異なっている。九鬼は、芸術の形式は人間の意識の様態に基礎づけられているという主張を例証するために引用しているのだが、森田は建築が世界秩序を分有することの例証として引用している。

結局、森田は1929年から30年にかけて関西日仏学館のロジュール・バレの講義でヴァレリーに出会い、九鬼周造の著書から「エウパリノス」に接近していったと考えられる。しかし、その理解は深田康算から学んだプラトン哲学が基礎となっていた。

### (3) ヴァレリー「エウパリノス」の制作論

フランスの詩人ポール・ヴァレリー (Paul Valéry, 1871-1945) の対話篇「エウパリノス」には建築の制作をめぐるさまざまな省察が断片的に書き綴られている。これを総合的に把握し、制作の理論として理解することを試みる。そのために、「エウパリノス」の叙述全体を内容のまとまりごとに裁断し、制作の時間的進行に即して一次的な時間軸に再配置してみる。一連の流れは、制作前、制作中、制作後の三期に区分されることになる。しかし、この試みは理論化が直線的時間軸によっては困難であることをただちに明らかにする。そこで実在的、叡智的、潜在的の三つの領域をあらたに導入して三次元空間を設定し、これらの中で、身体、精神、世界の三つの要素、観想と制作の二つの活動がどのように展開されるのかについて、とくに精神に着目して明らかにした。

「エウパリノス」の叙述は次のように再構成できる。

#### [制作前]

自然の観察：精神は自然に対面すると既知の概念を捨てて、事物の純粋な観察へと向かう。

そして感覚的なものを捨てて、イデア的な「全一」へと遡行する。しかし、その結果、何一つ理解できなくなってしまう。「全一」のイデアを知ろうとした精神は挫折に直面する。そこで、精神はすべてを知ることをあきらめ、知識の一部に満足して造ることへと方向転換する。そうして、自然物と人工物の原理的な差異を発見する。すなわち、自然物は造るものと造られるものが一致しているのに対して、人工物はそれらが分離していること、自然物は部分より全体が複雑であるのに対して、人工物は部分を統合する全体の方がはるかに単純だ、ということである。

自然との交感：自然に対して精神が向かう場合とは別に、身体が自然に対面する場合がある。このとき自然と身体とのあいだに交感が生じる。身体が自然を知覚すると、その反作用として自然によって身体が捉えられているような官能的合一が体験される。こうした世界との交感の経験が作品制作の動機へと転じていく。

#### [制作]

制作に踏み出した精神は、自然から有効な原理を抽出しようとする。そこには「徳も不徳もなく」、精神はただ己の生存のために自然を利用しようとする。自然から利用できる諸原理が抽出されると同時に、解決すべき問題が整理され、さまざまな観念やイメージが夢想され、現れては消えていく。

これら不定のイメージを形象へと定着させるのが「ことば」である。ことばは身体の運動を制御しつつ、形象を産出していく。この「ことば」は純粋可能の領域に属するものでありつつ、身体によって形象化される。それが「幾何学」である。したがって、幾何学は半ば抽象的であり、半ば具象的な性質をもっている。

精神はその沈黙の奥をさまよいながら、こうした幾何学を導くことばとの出会いを待つ。そして首尾良くひとつの単純なことばに出会うと、そこから一気に形象が産出される。その出会いはまったくの幸運な偶然というしかない。このようにして観念と行為、自然の必然と身体の技巧が統合され、作品が生みだされる。

#### [制作後]

作品は産み落とされると人々に触れることになり、あるものは黙し、あるものは語り、あるものは歌うように経験される。このうち歌うような作品では、建築はあたかも音楽のように感じられ、鑑賞者を包み込み、逆に鑑賞者は自分の外、その宇宙的な世界にいるかのような「詩的曖昧状態」を体験する。

精神はこのような流動的運動状態の体験を省察することによって、知覚の運動が制作における身体の運動を想起させることに気づく。そしてその運動を制御することばとは作者の「内的な法則」でありつつも、普遍的

な永続性を獲得する。そしてその反作用として、作品の産出によって作者も構築されることになる。自己の構築は精神に無情の満足をもたらし、次なる制作の動機となる。

以上のように、「エウパリノス」の叙述を時間的に整理したが、さらに理論化を試みた。

基本要素として、三つの領域——叡智的、実在的、潜在的——と、二つの活動——観想、制作——を措定することができる。アイデアの観想をめざす精神は実在的領域から出発しつつも、いっさいの感覚的なものの除去を試み、叡智的領域に向かって上昇していく。それに伴って、精神は純粹自我となる。ところが結局、この試みはなにものでもない自我となにものでもない「X」へと行き着いてしまう。そこで精神は叡智的領域への上昇を止め、実在界で制作する方向へと転換する。制作する精神は身体と未分化の潜在的領域に沈潜する。そこでは詩的曖昧状態が体験され、さまざまな観念が流動する。そしてひとつのことばに遭遇すると、身体の運動をとおして実在的領域へと形象を生みだす。こうして実在的領域にあらたな作品がつけ加えられる。

このように考えると、ヴァレリーがプラトニズムを否定してあらたに措定しようとした作品のアイデアとは、潜在的領域の底なしの深みから、作品が所在する実在的領域の平面に投影される光のようなものと理解することもできるだろう。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 4 件)

- ① 田路 貴浩、「Worringer：ゴシックの建築思想、その他」の意図とその背景、日本建築学会計画系論文集、査読有、80 巻、707 号、2015、203-212
- ② 田路 貴浩、ヴァレリー「エウパリノス」の制作論、日本建築学会計画系論文集、査読有、79 巻、695 号、2014、243-252
- ③ 田路 貴浩、森田慶一の「エウパリノス」との邂逅、日本建築学会計画系論文集、査読有、77 巻、680 号、2012、2471-2479

[学会発表] (計 8 件)

- ① 田路 貴浩、森田慶一とゴシック(2)、2014 年度日本建築学会大会学術講演梗概集(近畿)、建築歴史・意匠、2014、563-564
- ② 田路 貴浩、森田慶一とゴシック(1)、平成 26 年度 日本建築学会近畿支部研究報告集、第 54 号・計画系、2014、873-876
- ③ 田路 貴浩、ヴァレリー「エウパリノス」における構築の過程(2)、2013 年度日本建築学会大会学術講演梗概集(北海道)、建築歴史・意匠、2013、547-548

④ 田路 貴浩、ヴァレリー「エウパリノス」における構築の過程(1)、平成 25 年度 日本建築学会近畿支部研究報告集、第 53 号・計画系、2013、893-896

⑤ 田路 貴浩、森田慶一「いみたちを・こるぶしえり」とヴァレリー、2012 年度日本建築学会大会学術講演梗概集(東海)、建築歴史・意匠、2012、429-430

⑥ 田路 貴浩、森田慶一のポール・ヴァレリーとの出会い、平成 24 年度 日本建築学会近畿支部研究報告集、第 52 号・計画系、2012、817-820

⑦ 田路 貴浩、ヴァレリー「エウパリノス」にみる制作の端緒、2011 年度大会(関東)学術講演梗概集、F-2、建築歴史・意匠、2011、789-790

⑧ 田路 貴浩、森田慶一の初期の思想と作品——構築と生命、平成 23 年度 日本建築学会近畿支部研究報告集、第 51 号・計画系、2011、789-792

[図書] (計 0 件)

[産業財産権]

- 出願状況 (計 0 件)
- 取得状況 (計 0 件)

[その他]

### ①招待講演

Takahiro TAJI, L'architecte et théoricien Morita Keiichi et Formprobleme der Gotik de Wilhelm Worringer, École pratique des hautes études, Paris, FRANCE, 30 March 2015.

### ②招待講演

Takahiro TAJI, L'architecte et théoricien Morita Keiichi et l'Eupalinos ou l'architecture de Paul Valéry, École pratique des hautes études, Paris, FRANCE, 23 March 2015.

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

田路 貴浩 (TAJI, Takahiro)  
京都大学・大学院理工学研究科・准教授  
研究者番号： 50287885

### (2) 研究分担者

なし

### (3) 連携研究者

なし